

こころのふるさと

—希望の源泉—

松坂清俊

Kiyotoshi Matsusaka

文芸社

『Boon-gate』のPDF作品を ご覧いただく前に…

操作について

- 作品の多くは「もくじ」のページで、進みたいページの項目を押せば、そのページまでジャンプし、また、ジャンプしたページのタイトルを押せば、目次のページに戻るよう設定しております。
- 直前に開いていたページに戻るには、画面上の「◀」ボタンで、直前に開いていたページに戻ります。

読み方いろいろ

- 通常は画面の「倍率」が100%前後になっていますが、「倍率」を150%まで高めると文字が読みやすい大きさになります。
- 通常は「見開きページ」で設定されていますが、「単一ページ」にすると読みやすく感じます。
- 読み進めるときは、「十字キー」を使用すると手軽です。
- 「サムネイル機能」を使用して読み進めると、2～3頁からとばし読みするのに便利です。
- 頁を「回転」させることが可能です。地図などを拡大して見るときに便利です。

<http://www.bungeisha.com/PDFis/05-top1.html> でPDF作品についての説明を致しております。ご参照ください。

こころのふるさと

—希望の源泉—

松坂清俊

Kiyotoshi Matsusaka

文芸社

はじめに

子ども時代の自然のなかでの日々の生活とその後の生き方を回想し、あらためて現在の自分を振り返ることにしました。そして、残された人生の課題を見出したいという願いもあります。

一章では、戦争中と戦後のきびしい時代にもかかわらず、浜辺の村の子ども（わたくし）の自然のなかでの豊かな日々を思い出してみました。現在のわたくしの「遊びごろ」、「子どもごろ」の原点であることに気付きました。

二章は、これまで避けていた問題、つまり「父母とのこと」を集中して追想することとしました。すべての子ども（人間）は、父母あつてのことです。人生の終わりまでには、父母と「折り合い」をつけなければなりません。

特に思春期、青年期には、進学させてくれたこと、学費を送ってくれたこと、食べ物などの小包を送ってくれたことなどには感謝しながらも、父母を受け入れられない自分を感じていましたが、あらためて父母とのあれこれを回想すると、六人の子どもを抱えた父母

の苦勞と子どもへの愛（やさしさ）がしみじみ感じられ、遅まきながら「父母との折り合い」がつき、やがて行かなければならない「父母のもと」へ素直な気持ちで行けそうです。

三章では、十歳（国民学校五年生）の夏休みの体験（長崎市の被爆）を経て、新制中学、高校、そして大学への志望・進学の紆余曲折、転学部と大学卒業後のこれまでのことなどを回想し、特に重度の知的障害児から多くのことを学んだこと、また最近の子どもたちの心と行動の危惧を訴えました。子ども（人間）の健やかなころの源泉については、五章と六章でとりあげました。

四章は、わたくしの二人の息子（現在二人とも三十歳代）の幼児期のころ（興味）と行動が成人後もどのように残っているのか、当時のメモから紹介しました。わたくし自身の子ども時代のころとその後については、本書全体に反映されています。

五章では、本書の主題である、より良く生きるための「希望の源泉」について、わたくし自身の生育史と専門領域の学習と臨床経験から、あらためて考察し、論じました。最近の子どものさまざまな問題や事件の発生の主な原因・要因は、まさに「希望」の喪失・剥奪にあると思います。それは「愛」の喪失・剥奪によると言えます。本章の初出は、『子ども（人間）の本当のころ——こころの恢復——』（二〇〇三年、近代文芸社）です。

初版はなくなっていました。再版されましたので、あわせて読んでいただければ幸いです。

六章は、五章の「希望の源泉」につづいて、より良く生きること、つまり「生きがい」のある生活と人生について、これまで「ささやかな生きがい」としてきたものから、わたくしに残された人生の「生きがい」を確認することにしました。

すべての人々（子どもと大人）が、あらためて「生きがい」のある生活と人生の問題を真剣に考えなければならぬ現在の状況を杞憂していることを付け加えておきたいと思いません。

七章は、昭和十年前後の男の子に爆発的な人気であった「のらくろ」（漫画）に対すわたくしの想いです。実は、「のらくろ」（漫画）に関しては、わたくしの年代は遅れて現れた子どもです。昭和十六年（国民学校一年入学）には、「のらくろ」（漫画）は発行中止になっていました。経済的に余裕のある家の五、六歳年長の男の子は、「布表紙の単行本」や「少年倶楽部」を持っていました。国民学校三、四年の頃（戦争中）、年上の友達の家で、あの口と目のふちと両足だけが白い「のらくろ」に出会いました。

しかし、その後忘れていましたが、昭和四十年代に入って、「のらくろ」（漫画）の復刻

版が発行され、またテレビでアニメ漫画が放送されました。いろいろの「のらくろ」グッズも販売され、「のらくろ」への想いが再燃しました。

ブルドッグ連隊へ入隊した野良犬の「のらくろ」は、ハマ・ドジを連発しながらも、最後には手柄をたて、昇進します。最近の漫画に比べると、単純・素朴なストーリーですが、心ひかれるものがあります。最近の子どもたちには、どうでしょうか。「ドラえもん」が好きな子どもは、「のらくろ」も好きになるに違いないと思っています。

八章は、子どもの頃（昭和初期）、日常使っていた食器（茶碗、皿類）やお祝いやお祭りの際、ご馳走が盛られていた伊万里の大皿や酒徳利への郷愁が、特に二十歳後半頃から強くなりました。あの頃は、お盆や正月には親戚が寄って、伊万里の大皿に盛られた刺身や煮物を楽しみました。結婚式もお葬式も家で行われました。桜花の下で鯉が泳いでいる伊万里の大皿（径五十数センチ）を三月も下旬になると飾ります。

また、一章に紹介したように、中学校（旧制）受験準備の頃（翌年から中学校まで義務制になり、全児童が中学校に進学することになる。現行制度）、母親から「釣り舟を買ってやるから、進学しなくてもよい」と言われたほど、勉強そっちのけで魚釣りに明け暮れていたわたくしは、海辺の職場（大学）のせいもあって三十歳過ぎてからまたまた魚釣り

に夢中になりました。その一端の記録です。

九章の創作三編は、東北地方のある町が企画した「雪」にまつわる短編小説の募集に際し、応募したものです（年一回）。「初夢」は、全国から千編以上の応募の中から、四十編余選ばれたなかに入ったと連絡がありました。最終的には選外になりました。「初夢」の内容の半分くらいは、小学生の頃の体験に基づいています。「新生」も、大学生の頃、風邪による高熱で寝込んでいた時の深夜に見た夢が絡んでいます。二章の「父母との折り合い」の問題と関連していると思います。「雪ん子」の内容の一部は、出会った子どもと親のことが取り入れられていますが、最後の部分は書き改めた方がよいと感じています。

自分でする楽しみ、見る楽しみ、買う楽しみ、使う楽しみ、見せる楽しみが、日々の生活の楽しみ（生きがい）の一つであったこともありましたが、遅まきながら「この程度の楽しみ（生きがい）」から卒業しなければならぬ年齢になってしまいました。

フランクによる「創造価値」や「体験価値」から「態度価値」への転換が大きな課題です（この問題については、特に六章で省察しました）。

このようなことから、本書の内容・話題は自伝的なものですが、次のような問題意識と

ねらいもこめられていることを明言しておきたいと思います。

近年の大人の、そして子ども心痛む問題や事件の大きな原因や背景は、自分の行動が他人に対し、また社会に対し、さらには自分自身にとってどのような影響を及ぼし、またどのような意味があるのか。それは、そのことの想像性（予期、予想、期待、イメージ……）の欠如・希薄にあると考えられます。

他人や社会に対する共感や想像性は、子ども時代の自然とのふれあいと友達との交わり・ふれあいのなかで育ち、獲得されます。もちろん、好ましい親子関係がその基盤になります。

家庭内だけでひとりテレビを視聴し、テレビゲームに熱中し、学習塾通いその他の習いごとに明け暮れる現在の子どもたちの偏った毎日の生活が、他人のこころと体の痛み・悲しみや喜びを共感し、想像する心性の育ちの欠如・希薄をもたらしていると感じています。子どもたちの世界で激増している他人や社会への攻撃や破壊行動、たとえばいじめ、暴行・暴力、殺傷、公共物の破壊や対人関係や集団生活からの逃避は、自然のなかでの動植物とのふれあいと友達との交わり・ふれあいのなかで育つ共感性、協同性、想像性の欠如・希薄によるのではないのでしょうか。また他人や状況や環境に対する「自己統制」の欠

如によるともいえます。

社会的人間としてのこのような心性は、子ども（人間）の自然性（本性）の育ちを阻害し、歪めるような子ども時代の生活環境がもたらしていると思います。

昭和初期（昭和二十年前後～一九四五年前後）、国としては大変きびしい時代の浜辺の村のわたくし（たち）の子どもの頃の親子関係を中心とした生活体験の上に、現在のわたくし（たち）があるということを、年を経るごとに強く感じるようになりました。このことは、すべての人についても同じことです。

わたくし自身の残された人生の生き方の手がかりをつかむためばかりでなく、子どもたちの、孫たちの現在の生活のあり方から、子どもたちの、孫たちの現在と将来そして日本社会の将来を強く危惧し、多くの人が子ども（人間）の自然性（本性）について、あらためて確認する機会になることを願って、本書を公刊することにしました。

このことを、読みとっていただければ幸いです。

目次

はじめに 3

- 一章 忘却の淵から星の光を——懐かしい日々—— 12
- 二章 亡き父母を想う——父母との折り合いをつける—— 59
- 三章 その時、それから、これから 73
- 四章 幼児の心とその後——二人の子どもの例から—— 84
- 五章 希望の源泉——より良く生きるために(一)—— 94
- 六章 「生きがい」をめぐる——より良く生きるために(二)——

七章 「のらくろ」(漫画)と私 158

八章 郷愁 180

九章 創作三編「初夢」・「新生」・「雪ん子」 193

あとがき 217

一章 忘却の淵から星の光を——懐かしい日々——

失われたもの

穏やかな小春日和の日に、突堤の先で糸をたれ、釣り船や汽船の向こうに霞んで見える対岸の山々を眺めていると、六十年ほども前の海辺の村での子どもの頃のあれこれが、ふと鮮明に浮かんできます。

こんな瞬間をこれまでに何度も経るなかで、残された少ない生のために、その「子どもの日の断片」をできるだけ克明に文字化しなければならぬ、文字化したいと思うようになりしました（実際に取り掛かってみて、細部の想起が困難であいまいな部分が何箇所もありました）。

その上で、さらにこれまでのことも振り返りながら、自分の人生の意味付けをし、これ

からの生き方を求めなければならぬ年齢になってしまいました。

神谷美恵子は、広く読まれている『生きがいについて』のなかで、次のように述べています。

「過去のいろいろな出来ごとのなかでも特に意味のある瞬間が、暗い忘却の淵から星のように光って浮かび上がって見える。そのとき、ひとは過去の歴史に対して一つの選択を行っているのである（生きがいを感じる心）」

はるか遠くのもやのなかにかすかに瞬く星の光のように、時折想い出されることですが、この際今までになく集中してその「星」を注視し、またその「星」だけでなく「星座」として鮮明に想起したいと思います。

つまり、子ども時代の日々の喜び、楽しみ、生きがいとしていたことを顧み、あらためてあの充実感・効力感・達成感・解放感をこれからの人生のなかで発見し創造しなければならぬと思います。

このことは、最近の子どもと大人のすべての人の緊急の課題ではないでしょうか。

科学・技術のめざましい進歩・発展と産業・経済の発展、そして海や野山の自然の破壊は、人間の生活を大きく変えました。それとともに、子ども（人間）の身体生理的・心理

的「自然性」を歪め、破壊しつつあることを感じないわけにはいきません。

子ども（人間）と社会の将来を危惧していた折、「忘却の淵」にある五、六十年前の海や野山の自然と「心と体の自然」とのふれあいを、はるか彼方のかすかな「星のまばたき」を夜空に発見するように、ふと気付き始めました。

自然や社会とわたくしたちの生活を過去に戻すことはできませんが、時代と社会の流れに無自覚に流されるのではなく、流れをわずかでも止め、あるいはわずかでも変えるためには、まずは「星のまばたき」をより広く明るく輝くように鮮明に想起することが第一歩だと思っています。

社会のあり方や人々の生活と人生は、社会のいろいろの進歩や変化とともに多かれ少なかれ変わります。それにしても、この二、三十年間の急激な変化は、わたくしたちの生活を大きく変えました。便利になり豊かになったことも事実ですが、最近の子どもや大人の事件や問題や社会の風潮を真剣に考えると、喜んではいられません。

より良い社会、より安全で豊かな生活と人生を創造するために、まずは現在のあり方を過去に照らして反省し、特に悪い点（問題点）を確認しなければなりません。

このように言うと、大変難しいことになりますが、具体的にはたとえば、「子ども（自

分) たちの日々の生活のこと」「いじめや学級崩壊のこと」「非行や犯罪のこと」「不登校のこと」「学習意欲低下のこと」「自然のなかでの遊びや友達とのふれあいが少なくなったこと」などを真剣に考えて、何が問題か、どうあるべきかを探ることです。

この三十年来の社会の変化は目覚ましいものです。

特に、五十歳程度以上の年齢の者（私は七十歳です）には、もう驚くばかりの変わりようです。実際に、いろいろのこの理解に苦しみ、ついていけないことが多くあります。知識や技術的にもそうですが、そのこと以上に心配なのは、ものの考え方や感じ方や態度です。二十一世紀の社会と人間のあり方として、自然の成り行きで、これまでの人間の歴史は、このように徐々にまた急速に変化し進歩（？）してきたと思えばいいのかもしれないが。

車・テレビ・電話・コンピューター・携帯電話などの普及、食糧や物の氾濫、高学歴化、レジャー施設や機会の急増、職業の高度化、個人主義、国際化、自然破壊……などが、私たちの日常の暮らしのあり方と物事の感じ方や考え方を大きく変えてきました。

また、これらに関連して、教育については、小学校までが義務制の時代から中学校まで義務制（昭和二十二年度より私の年齢の者から）になり、そしてもうかなり前から高校ま

でも実質上（九五、六％の進学率）は義務教育のような状態です。短期大学と四年制大学への進学率も五〇％近くにもなり、多くの青少年が「学校」に拘束されています（高学歴化）。

もちろん、社会の科学・技術や経済・商業の進歩・発展と職業の多様化と高度化による生活の複雑化に伴って、身につけなければならない知識や技術は多量かつ高度になるので、高学歴化は自然の成り行きではあります。

空襲警報

これからの話は、半世紀以上も前、昭和二十年（一九四五年）前後の海辺の村の子どものたちの日々の暮らしの一端です（「それがどうした」、「そんな昔の話聞いてみましょうがない」とは思わないで、現在の皆さんの日々の生活と比べて下さい）。

現代社会のなかでは、半世紀も前の生活には返ることはできませんが、「失われていること・失っていること・奪われていること」を少しでも感じること、認識することは、挽回し、実現・実行できなくても大切なことと思います。

わたくしの小学校（昭和十六年度から昭和二十一年度まで「国民学校」と呼ばれていた）時代は、アメリカやイギリスと戦争中でした。五年生になった頃には、海辺の村の上空をアメリカやイギリス軍の戦闘機（グラマン）と爆撃機（B29）の編隊が毎日のように通り過ぎて行きました。

「警戒警報のサイレン」が鳴ると、授業を止めて、防空頭巾（二、三センチほどの厚さの綿を入れた布地の被り物で頭を保護するもの）をかぶって、こわごわ家に帰りました。その途中で、「空襲警報（敵機が近づいたということ）のサイレン」が響き、「ブーン」と飛行機の編隊が上空に近づくと、田舎道の溝に必死に体を伏せました。サイレンは、村役場の建物の屋根の一番高い所にとりつけられていました。

敵機の目的は、長崎や佐世保や博多方面の武器や飛行機を作る施設なので、私の村や近くの町（島原）には爆弾を落とすことはありませんでした。

しかし、そんなある日、長崎か博多方面を爆撃しての帰りの編隊から、あの小型ですばしいグラマン戦闘機の一機が、「キーン」という音とともに急降下しました。潮が引いた浜で潮干狩りしていた人に向けて、機関銃の「バリバリバリ」という音とともに、飛行機からキラキラと光るものが流れました。そして、戦闘機は、斜めに急上昇し、編隊を

追いかけるかのように去りました。

怖くてどきどきしながら、軒下で息をこらして見ていました。人に命中しなかったようでした。「多分、面白半分にいたずらしたんだろう」と大人たちは言っていました。私の家の屋根瓦に、機関銃の流れ玉が突き刺さっているのを見つけたこともあります。

それぞれの家は、防空壕（飛行機の攻撃からの被害を予防する）を掘っていました。わたくしの家では、家の裏の崖に、父と母が鉋くわやスコップで何日もかかって横穴の防空壕を掘っていました。大切なもの（食器や食糧や衣類など）が入れてありました。

「空襲警報のサイレン」が響くと、子どもたちは真っ先にその防空壕に逃げ込みました。確かに、「怖い気持ち」もありましたが、薄明かりのなかで兄弟や近所の子たちとふざけあつたり、トランプしたりで、何か楽しかったようにも思い出されます。年月が、その時の不安や恐怖をやわらげてくれたのかもしれない。

学校の校庭は、「さつま芋畑」になりました。日本全体が、食べ物も乏しくなり、少しでも食糧を用意しなければならなくなったからです。また、時々午後の授業を止めて、それぞれの集落に帰され、草を刈って「堆肥（畑の作物の肥料）作り」をしたり、「桑の木の皮はぎ」をさせられました（桑の木は、葉をカイコの餌にするために植えてありました）。

当時、島原地方の農家では、養蚕が盛んでした。

二本の青竹をきっちりくつつけて地面にしっかり打ち込んで、縄で巻きます。左右の二人できつくしめつけた二本の竹の間に、一メートルほどの長さの桑の枝を挟み込み、もう一人がいきおいよく引つ張ると、枝の皮が割れ、皮だけはぎ取りやすくなります。

皮はぎは、低学年生の仕事です。時々、上級生（小学校六年を卒業して、旧制中学校進学も就職か家業にもつく必要がなかった者が、さらに小学校内の高等科に二年間残った）から、早く作業するよう小突かれたり、きつく注意されたりしました。現在の「いじめ」とは、質が違うと思います。

この作業には、ひそかな楽しみもありました。休憩時間に、桑の老木の赤紫色に熟した桑の実を食べることができからです。でも、ポケットに入れた桑の実がつぶれて、服やシャツに赤紫の汁がしみこみ、夜には母に叱られました。唇も染まっていました。

ところで、「桑の枝の皮」をからからに干して、学校でまとめて町の繊維工場に供出します。皮からとった繊維で出来た布地の洋服がつくられました。一年に一、二回、学校で黄土色の学生服が抽選で売られました。一回だけ、くじ引きに当たり、得意げにそれを着て登校したことを想い出します。

あの日

そんな日々を送っている時、「あの日」がやってきました。小学校（国民学校）五年生の夏休み中のことです。

それは、昭和二十年八月六日午前八時過ぎの「広島原爆投下」と八月九日午前十一時過ぎの「長崎原爆投下」です（そして、同年八月十五日の「終戦」です）。

原爆投下時の子どもたちの体験記、たとえば広島当時の幼児と小学生と中学生による記録『原爆の子』（昭和二十五年、岩波書店）や『少女14歳の原爆体験記』（橋爪文著、平成十四年、高文研）などに、想像を超える地獄絵のような悲惨な状況が、記録されています。大人の被爆体験記としては、『原爆体験記』（広島市原爆体験記刊行会編、昭和四十年、朝日新聞社）があります。

広島市では、死亡者約11万8千人、重軽傷者約7万8千人（昭和二十二年八月現在）。長崎市では、死亡者約7万4千人、負傷者約7万5千人（昭和二十年十二月現在）という記録を取っておきます。

あらためて、ぜひ多くの子どもと大人に読んでもらいたいと思います。

昭和二十年（一九四五年）八月九日の昼前、対岸に熊本が見える海辺の村（島原市近郊）のわが家の軒下で、目の前の有明海の上に広がる灰黄色の空を不思議に思いながら見上げていました。

その日から三、四日経って、学徒動員で長崎の兵器工場に駆り出されていて、原爆で顔や手腕にむごたらしく火傷を負った村の中学生（旧制、受験して進学する）の姿を見ました。

当時の多くの子どもと大人が、体と心の傷（トラウマ）を負いながら、廃墟から徐々に日本の復興に努力したことを忘れてはならないと思います。また、現在でも七十〜八十歳代の被爆者が療養していることを忘れてはなりません。

戦前から戦後十年余の間は、現在の私たちの生活からは想像もできないくらい貧しいものでした。まず、食糧不足です。たびたび、母が農家に「買い出し」に出かけて、夕方に「かぼちゃ」や「ジャガイモ」の重い袋を背にして帰って来た姿が想い出されます。麦九割・米一割程度か麦とさつま芋のご飯がしばらく続きました。田舎でこんな状態ですから、都会ではもっと大変だったことでしょう。

それでも、日本の復興は目覚ましく、昭和三十八年（一九六三年）東海道新幹線開通や昭和三十九年東京オリンピック開催、そして昭和四十五年大阪万国博覧会開催などができるまでに復興しました。でも、実はその頃から「登校拒否（不登校）」や「家庭内暴力」や「幼児虐待」が、学校や社会の話題になり始めたのです。このことは、何を意味するのか考えてみなければなりません。

これまでの話は、これからの話の背景または前段として紹介しました。

海辺のわが家

わたくしの生家は、「木炭バス」が通ると、もうもうと砂ぼこりが舞い上がる道路沿いがありました。四、五メートル幅のその道路は、海（有明海）に沿っています。家の向こう、つまり海側には、頑丈な堤防が築かれています。堤防の四メートルほどの下が海面になります。

この堤防は、大正時代の台風の時、大波の被害を受けたので、何年もかけて築かれたという事です。家の二階がわたくしと当時中学生の兄の部屋でした。特に、強い風の日の



18歳まで過ごした生家

大潮の時の満潮の夜には、堤防にあたる波の音が「ジャボン、ジャボン」と聞こえました。あまり満ちてこない小潮の時は、堤防までは海水（波）は届きません。その時は、「ヒタ、ヒタ」と海水が静かに寄ってくるような海のささやきが聴かれました。有明海は、特に大潮時期の満潮と干潮の時の潮位の差が大きいことで有名です。

高校を卒業し、郷里を遠く離れて何年も経ってから帰郷して二階の部屋に寝ると、波の音が気になってなかなか眠れませんでした。そういえば、別の部屋に寝た時、柱時計の時刻の数だけ鳴る時報のために眠れなかったことを思い出します。どちらも、子どもの時は気にならなかったのに（生家の木枠の柱時計

と同じようなものを現在の家の柱にかけています。

五、六キロメートルほどの向こう岸は、熊本県です。空気が良く澄む秋の日には、かすかに「阿蘇山」の噴煙が見えました。遠くの対岸の白い煙の移動で、汽車が走っていることが想像されました。大きい建物や煙突などもかすかに見えました。

春から秋にかけては、のんびりと浮かんでいる一本釣りの小船や帆を掛けて移動している船や漁師がゆっくりと櫓を漕いでいる姿が見えました。

一軒先の同学年のS君の家は漁師ではありませんでしたが、釣り舟がありました。S君と二歳上のS君の兄が、たまに釣りに誘ってくれました。釣り場まで、必死に櫓を漕ぎます。時間によっては、潮流に逆らって漕がなければなりません。

釣り糸を手にもち、キスや小型のフグのあたりを待ちます。キスが餌をつつくあのあたりの何とも説明のしようのない手指の感触、とうとう「釣りにはまり」ました。このことについては後日談がありますが、もう少し後に紹介します。

時には、かなり大きな客船や貨物船が遠くにその雄姿を現しました。また、島原と熊本間の中型の連絡船も日に何回か見かけました。四歳か五歳の頃、父が商用で熊本に行く時に、兄弟のうちわたくしひとり連れて、この連絡船に乗せてくれたことを覚えています。



生家の後方の雲仙普賢岳（平成2年11月の噴火で姿が少し変わった）

海の上から両方の対岸をいつまでも飽きずに眺めていた幼児の自分の姿は、なかなか鮮明には浮かびません。

高校二年生の初めの頃に「商船大学」志望だったのは、この風景の印象が関係あるのかもしれない。将来は、「外国航路の船長か機関長」を夢見ていました（しかし、その後すぐに、「農学部」志望に変わりました。食糧難に貢献しようという「大志?」を抱くようになったからです。さらに、現在の専門分野に転向しました。ここでは、そのいきさつは省略します。三章参照）。

海と反対側の家の後方には、「雲仙普賢岳」（標高二三六〇メートル、噴火後少し低くなったかもしれない）があります。平成二年十

一月十七日朝、二百年ぶりに煙があがり、平成三年六月に大火碎流が島原市街の南に隣接した地域に流れ、四十三名の死者が出ました。また、かなりの田畑が土石で埋まりました。普賢岳の山頂の形も少し変わりました。

島原市街のすぐ近く、普賢岳の麓にそれほど高くない「眉山^{まゆ}」があります。わたくしの生家の斜め後方に位置した「眉山」の稜線は、「水兵さんの寝顔」に似ていました。

六十年も経った今でも、そのような寝姿を思い浮かべることができませんが、現在もそのような姿で横たわっているでしょうか。

私の原体験

さて、このような海辺の村で生まれ育ったわたくし（たち）の海とのふれあい（遊び、楽しみ）の話にうつりましょう。先に紹介したように、戦争中から終戦後の日本社会の大変不安定な、またきびしい時代にもかかわらず、田舎の子どもたちの日々の生活は、比較的のんびりしたところがありました。また、豊かな日々だったことを、あらためて感じます。

途中省略

本編はダウンロード時間短縮のため省略版でお届けしています。
途中省略なしの完全版をご希望の方は製品版をご「購読」ください。

著者プロフィール

松坂 清俊（まつさか きよとし）

1935年、長崎県島原市近郊生まれ。

県立島原高校、東京教育大学（現筑波大学）教育学部卒業。

国立重度知的障害児施設「国立秩父学園」勤務。京都大学大学院博士課程退学。三重大学教授。同大学教育学部附属養護学校校長併任（1989～1992）。1998年、同大学定年退職。三重大学名誉教授。

現在椋山女学園大学人間関係学部特任教授。同大学院人間関係学研究科長（2002～2003）。

1966年より、四日市市家庭児童相談室で幼児を中心に発達相談・養育相談と障害児保育・教育にかかわっている。その他、県市の多くの関係委員会委員（長）歴任。

著書『障害幼児の発達援助』（コレール社）、『ことばの育て方』（日本文化科学社）『子ども（人間）の本当のこころ——こころの回復——』（近代文芸社）他。

臨床心理士。三重県臨床心理士会会長（1993～2002）。1989年、教育功労賞（文部大臣）。2004年、功労賞（三重県特別支援教育振興会設立50周年記念）。

こころのふるさと——希望の源泉——

2005年11月15日 電子出版発行

著 者 松坂 清俊

発行者 瓜谷 綱延

発行所 株式会社文芸社

〒160-0022 東京都新宿区新宿1-10-1

電話 03-5369-3060（編集）

03-5369-2299（販売）

<http://www.boon-gate.com>

© Kiyotoshi Matsusaka 2005 Corded in Japan

ISBN4-286-00160-1

（文芸社発行の通常書籍（紙の本）については、全国書店でお尋ねいただくか、「文芸社ON-LINE」サイト、<http://www.bungeisha.co.jp>を御参照ください。）